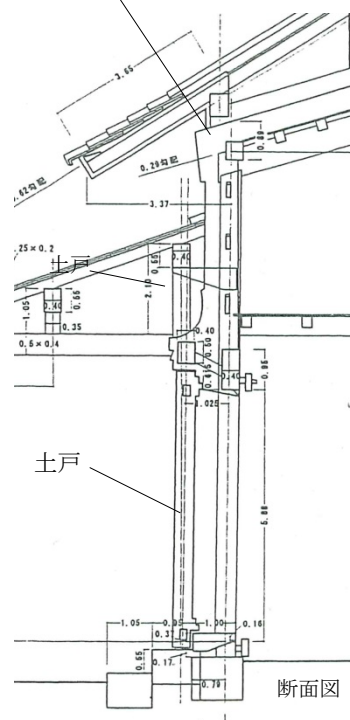


寸法：幅2.52尺×高5.95尺
形式：軸摺框戸構造
仕上：全面漆喰塗
築造：江戸期1830年以降
用途：穀蔵

図1

蔵全体を土壁仕様で塗りつくしている。

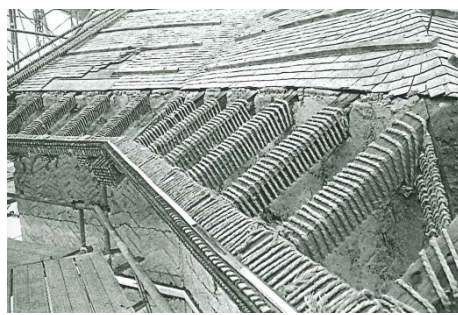
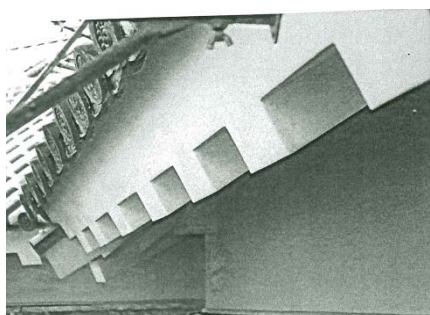


●土蔵の漆喰扉

八代家住宅の穀蔵の耐火建築の土戸は、軸摺形式の框戸であり、左右の縦框に横骨（中棧）を差し込み、柄楔で止め、横骨に縄巻きの小舞竹を縦方向に打ち付け、筋交いは中骨と相欠し取り付けしている。そこに荒壁土を塗り、乾燥後に班直しにより形を整える。型起こしの際は、型引き鏝により召合わせ等取り合いを調整しながらの施工である。

材寸等は縦框／2.5寸×2.3寸梅材 上・下框／2.5寸×1.85寸 中棧／2.3寸×1.3寸程度

【指針】古民家改修に際して、自然素材の漆喰を活用し引き戸に転用することも可能である。その場合は、骨組みと土材の軽量化が必要である。内部の可動式間仕切り壁等であれば、組子等を太くし、ラスボード張り漆喰左官仕上げ程度とする。



松山城の隠門続櫓の軒先まわり、漆喰塗りあげの下地と完成後の例

図2

●漆喰塗籠による耐火被覆

軒先を全面漆喰等の土壁仕様とする例は、町家や蔵などにも活用された耐火仕様である。伝統的には下地の小舞掻きや木摺加工までは大工仕事であり、それ以降の土塗りから仕上げまでは左官職人の仕事である。

写真は「土佐漆喰」による工法であり、現在でも高知県での漆喰技法として継承されている。土佐漆喰は、基本的に原材料に（のり）を混ぜて使わないのが特徴とされ、同時に左官技術もその技法による難しさがある。松山城の修理工事においても「土佐漆喰」が使われているが、修理仕様によると（のり）にあたる角又（ツノマタ）や銀否草が混ぜられている。ここでの土佐漆喰の調合比（重量比）は水10：塩焼消石灰10：スサ1.4とある。現在における「土佐漆喰仕上げ」とは、塩焼き焼石灰と発酵処理した藁すきで、練り合わせ、練り置きして製造された水ごね漆喰で海草のり、スサを配合する必要がない左官技法である。

右図は滋賀県の重要文化財民家旧西川家土蔵における軒先の漆喰塗り込め下地の現況調査記録の説明図である。小舞竹下地以外の基本的な工法であるが、竹材や木部の材寸、割り方は現場により異なる。

垂木など杉皮1枚巻きの上、径2.5分の棕櫚縄を1寸前後の空き間で巻き付け

目通り径1.3分の竹に径2.5分の棕櫚縄を巻き付け

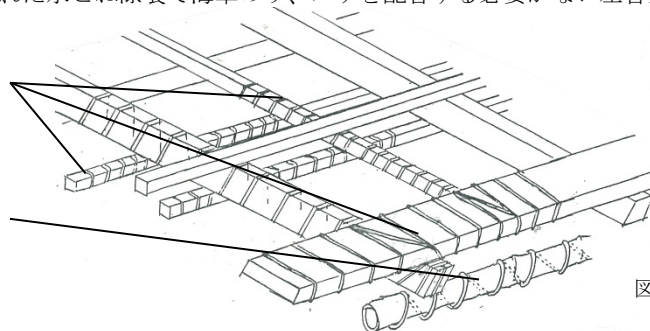


図3

図1：「八代家住宅長屋門ほか4棟保存修理工事報告書」（2004）

図2：「松山城天主他六棟保存修理工事報告書」（2007）

図3：「旧西川家住宅修理工事報告書」（1988）より